

はじめに

本書は、映画、写真、テレビ、パソコンといった、私たちの周囲に溢れている映像文化を、人間の社会生活の営みとして社会学的に捉えるための教科書です。映画や写真を、ただ娯楽や芸術として味わって終わらせるのではなく、そもそもなぜ人間が多様な映像文化を自らつくりだし、楽しもうとしてきたのかを考え、人類の社会生活の歴史のなかで位置づけ直すこと。そのような社会的な思考のきっかけを読者のみなさんに提供することを目的にしています。

いささか空想的なたとえ話ですが、もしいま宇宙人が地球にやって来て、人間はどのような生物であるかを、科学的に調査・研究することになったとしましょう。まず彼らはきっと、人間が社会的に活動している最中に、必ず誰かがそれをカメラで撮影しているという事実に驚くに違いありません。政治的議会の様子から自然災害の状況から有名人の恋愛まで、あらゆる出来事の周囲にはいつも多くのカメラマンがそれを撮影しようと必死に群がっていますし、観光スポットでは、つねに大勢のふつうの人びとがカメラを構えて美しい風景を写そうとし、結婚式や誕生日や運動会など、あらゆる儀礼的活動を人間は撮影して記録しています。そうやって記録された写真の枚数や動画の長さは、地球上すべてを合わせると計り知れないほどの分量になっているに違いありません。

そういう意味でその宇宙人科学者は、人間とは「映像」にとりつかれた生物だと考えるに違いないでしょう。実際私たちの社会生活は、政治活動も経済活動も家族や友人のコミュニケーション活動も、さらには医療活動や軍事・警察の活動にいたるまで、すべてが映像技術の媒介なしには成り立たなくなっています。ただ私たちは、そのとき映像技術は社会活動の道具として利用しているだけで、政治や医療や軍事の本筋には関係のない付随的な問題にすぎないと考えているだけのことです。でも、本当にそういいきれぬでしょうか。テレビ中継のない政治活動も胃カメラのない医療活動も衛星写真のない軍事活動も私たちはもはや考えることができないでしょう。だから実は、映像をつくりだすことのほうが人間の文化にとっては本筋かもしれないのです。

だから本書は、これまでの常識的な視線をほんの少しずらして、人間の社会

活動を、映像文化の一種であるという視点から観察する試みとして編まれました。ハリウッド映画やテレビ番組も、それらが作品として優れているかどうかという視点からではなく、人間たちの社会活動の一種という視点から捉えようとしてきました。

構成としてはこうなります。第1部では、写真、映画、テレビ、パソコンといった映像技術の種類ごとに、それがどのような文化をつくりだしてきたかの歴史を説明します。第2部では、映像文化が家族や友人や国家などといった多様な社会的秩序をつくるのにどのような役割を果たしてきたかを考えます。ここまでが本書の総論的な部分です。後半は各論的に、さまざまな映像文化を扱っています。第3部では、医療や警察や科学的な観察といったハードな映像文化を、第4部ではアイドル文化や心霊現象やアニメーションといったソフトな(遊戯的な)映像文化を扱っています。

このような映像文化への視点自体が、学術的にも新しいものだといえるでしょう。ですので、私たちの記述や説明も、まだ教科書としては不十分なものかもしれません。しかしだからこそ、読者のみなさん自身が、本書をきっかけにして自由に考えてほしい。自分たちが宇宙人になった気分で、映像を通して人間の社会生活はどう構成されているかを大胆に議論してほしい。私たちは、そのような自由な思考と議論こそが、人文社会科学的な学問の最大の意義だと考えています。多くの読者が、本書を通して、私たちの社会生活をそれまでとは異なった相貌で見ることができるようになること。それによって人間や映像や社会の可能性について自由な考えをもつことができるようになること。编者としては、読者のみなさんがそういう思考の醍醐味に触れることを願ってやみません。

2016年7月

長谷 正人

執筆者紹介

(執筆順)

はせ まさと
長谷 正人

編者, 序章, 第2, 7章

早稲田大学文学学術院教授

主著 『映画というテクノロジー経験』 青弓社, 2010年。『映像という神秘と快楽
—— “世界” と触れ合うためのレッスン』 以文社, 2000年。

きくち あきひろ
菊池 哲彦

第1, 5章

尚絅学院大学総合人間科学部表現文化学科准教授

主著 『歴史と向きあう社会学——資料・表象・経験』 (共著) ミネルヴァ書房,
2015年。『記憶と記録のなかの渋沢栄一』 (共著) 法政大学出版社, 2014年。

かとう ゆうじ
加藤 裕治

第3, 12章

静岡文化芸術大学文化政策学部文化政策学科准教授

主著 『全訂新版 現代社会を学ぶ人のために』 (共著) 世界思想社, 2014年。『無印
都市の社会学』 (共著) 法律文化社, 2013年。

すずき ひろひと
鈴木 洋仁

第4章

東京大学大学教育総合研究センター特任助教

主著 『「平成」論』 青弓社, 2014年。『新・若者論を読む』 (共著) 世界思想社,
2016年近刊。

つの だりゅういち
角田 隆一

第6章

横浜市立大学国際総合科学部社会関係論コース准教授

主著 『歴史と向きあう社会学——資料・表象・経験』 (共著) ミネルヴァ書房,
2015年。『無印都市の社会学』 (共著) 法律文化社, 2013年。

おおく ほりょう
大久保 遼

第 8, 11 章

愛知大学文学部人文社会学科特任助教

主著 『映像のアルケオロジー——視覚理論・光学メディア・映像文化』青弓社,
2015年。『デジタル・スタディーズ3 メディア都市』（共編）東京大学出版会,
2015年。

ますだ のぶひろ
増田 展大

第 9, 14 章

立命館大学ほか非常勤講師

主著 『科学者の網膜』青弓社, 2016年近刊。「微生物のメディア考古学——生物
(学)とアニメーション」日本記号学会編『叢書セミオトポス10』新曜社, 2015
年。

まつたに ようさく
松谷 容作

第 10 章

同志社女子大学学芸学部情報メディア学科助教

主著 「微小重力空間におけるヴィークルとしての身体」『美学芸術学論集』第11号,
2015年。「映像身体の誕生——19世紀末~20世紀初頭における映像実践と身体の
関係」博士論文, 神戸大学, 2010年。

まえ かわ おさむ
前川 修

第 13 章

神戸大学大学院人文学研究科教授

主著 『痕跡の光学——ヴァルター・ベンヤミンの「視覚的無意識」について』晃洋
書房, 2004年。「写真論としての心霊写真論」一柳廣孝編『心霊写真は語る』青弓
社, 2004年。

目 次

序 章 映像文化というパースペクティブ	1
複製技術とアウラの凋落	1
本書の構成	2
テクノロジーとしての映像文化	2
コミュニケーションとしての映像文化	3
科学としての映像文化	4
呪術としての映像文化	5
平凡さの魅力とアウラの魅力	5

第 1 部 テクノロジーとしての映像文化

第 1 章 写真というテクノロジー	9
1 写真というテクノロジー	10
写真術の誕生	10
ダゲレオタイプという写真術	10
ダゲレオタイプの時代におけるネガ・ポジ法	11
2 写真の痕跡性	13
痕跡としての写真	13
ダゲレオタイプの一点性と写真の痕跡性	14
デジタル写真の痕跡性	16
3 写真の複製性	17
ネガ・ポジ法の台頭	17
写真の複製性による大衆化	17
複製性に支えられた写真の文化	19
4 「撮ること」の文化とデジタル時代の写真の文化	20
写真を「撮ること」の大衆化	20
デジタル時代における「写真を『撮ること』の大衆化」	21
デジタル時代における「撮ること」と「見られること」	22
第 2 章 映画というテクノロジー	25
1 テクノロジーとしての映画	26
科学装置としての映画	26
マレーとマイブリッジの連続写真	27
2 「撮る」文化から「見る」文化へ	29

	「撮る」文化としてのシネマトグラフ	29	「見る」文化としてのリュミエール映画	30
3	アトラクションの映画と古典的映画	32	「見る」文化の3つのパラダイム	32
	アトラクションの映画	32	古典的映画	34
4	イデオロギー批判と「アウラ」の凋落	36	映画のイデオロギー批判	36
	映画の社会変革性	37	チャップリンとミッキーマウス	38
5	映画文化のパーソナル化と「撮る」文化	39	映画のパーソナル化	39
	ポスト古典的映画	40	テクノロジーのパーソナル化	41
第3章 テレビというテクノロジー _____ 45				
1	「通信」と「放送」の間で揺れ動くテレビ	46	映画とは異なるテクノロジーの系譜	46
	「通信」か、「放送」か——ラジオの先行	48	ラジオ放送からテレビ放送へ	49
2	「放送」としてのテレビ	51	街頭テレビと大衆の受容	51
	ナショナルな共同性を産み出すテレビ	53	時間を編成するテレビ	55
3	繰り返される「放送」と「通信」のゆらぎ	57	テレビを「見る」ことのパーソナル化	57
	「通信」化する「放送」?	59		
4	テレビのゆくえ——「見る」の多様化・自由化のなかで	60		
第4章 パソコンというテクノロジー _____ 63				
1	映像文化のすべてを飲み込むパソコン	64	すべてを1つの画面に	64
	本章の目的	65		
2	パソコンの誕生と映像のパーソナル化	66	なぜ「パーソナル」か	66
	「パソコン」の誕生まで	66	「パソコン」の誕生	68
3	パソコンが映像文化にもたらしたもの=DIY化	70		

パーソナルという発想の転換 70 「ホール・アース・カタ
ログ」に見る「パーソナルな力」 71 「ホール・アース・カ
タログ」とパソコン文化 73

- 4 パソコンというテクノロジーの論じ方 74
日本におけるパソコンというテクノロジー 74 パソコンの
歴史と現在 75 パソコンが変えた映像文化の論じ方 76
「パソコン」はどのようなテクノロジーか 77

第2部 コミュニケーションとしての映像文化

第5章 個人をつくる映像文化 81

- 1 肖像写真とそこに写る人物 82
写真術黎明期の肖像写真 82 最初期の肖像写真をめぐるエ
ピソード 82
- 2 社会的記号としての肖像写真 83
肖像写真とブルジョワ文化 83 ブルジョワジーの社会的記
号としての肖像写真——カルト＝ド＝ヴィジット 84 ブル
ジョワジーのなかの個人——ナダールの肖像写真 85 ブル
ジョワジーの社会的記号からの解放——ザンダーの「20世紀
の人間たち」 86
- 3 同一性の記号としての肖像写真 87
個人を特定する肖像写真 87 司法写真の試み——ベルティ
ヨンのシステム 87 ベルティヨン・システムの限界——肖
像写真と個人の結びつきの不確かさ 88 パスポートの証明
写真と個人 90
- 4 コミュニケーションのなかでつくられる個人 91
肖像写真がつくる個人 91 写真の日常化とコミュニケーシ
ョンとしての写真 92 イメージがつくる拡散する個人の現
在——デジタル化とセルフイ 94

第6章 コミュニケーションをつくる映像文化 99

- 1 コミュニケーションをつくる写真文化 100

2	集団に埋め込まれた写真コミュニケーション	100
	集団を維持する写真コミュニケーション	100
	大きな集団に埋め込まれた写真コミュニケーション	101
	大衆化する家族写真コミュニケーション	102
	個人化する写真コミュニケーション	103
	「私」を構築する写真コミュニケーション	104
3	「つながる」ための写真コミュニケーション	105
	既知の集団から解放された写真コミュニケーション	105
	人間関係をつくるプリクラ・コミュニケーション	106
	拡散する写真と「写交性」	107
	「つながり」を求める写真コミュニケーション	109
4	「盛る」ための写真コミュニケーション	110
	「盛る」文化としての90年代プリクラ・コミュニケーション	111
	過剰な「盛り」とリアリティ感覚	112
	現実を「盛る」写真コミュニケーション	113
5	「つながり」と「盛り」の写真コミュニケーションのゆくえ	114
	「盛る」から「整える」へ	114
	「つながり」×「盛り」=?	115
	写真コミュニケーションはどこへ向かうのか	116

第7章 社会をつくる映像文化1 119

1	私的映像と公的映像	120
	「撮ること」「撮られること」「見ること」	120
	社会制度としての親密な映像	121
2	御真影——国家をつくった写真	122
	御真影と明治近代国家	122
	2枚の御真影	123
	写真に見守られる	124
3	オリンピック——政治の美学化としての映画	125
	複製写真とプロパガンダ映画	125
	『オリンピック』の撮影技法	126
	リーフェンシュタールと全体主義思想	127
4	アポロ月面着陸のテレビ中継——私生活の公共空間化	129
	テレビと消費生活	129
	テレビによる遠近法の倒錯	130
	アポロ月面着陸の生中継	130

5	映像文化研究と新しい映像文化	132
	記号論, 精神分析的アプローチ, オーディエンス論	132
	新しい社会の映像文化	134
第 8 章	社会をつくる映像文化 2	137
1	歴史的な瞬間の記録	138
	再演された国旗掲揚	138
	歴史の冷厳な瞬間	140
2	戦時国家とナショナル・シンボル	142
	第 7 回国債ツアー	142
	記念切手と海兵隊記念碑	144
3	消費社会とポップ・カルチャー	146
	映画『硫黄島の砂』の公開	146
	広告, ポップアート, そして iPad ケース	147
4	ポスト 911 の「硫黄島の星条旗」	149
	グラウンド・ゼロの星条旗	149
	映画『父親たちの星条旗』	152

第 3 部 科学としての映像文化

第 9 章	医療における映像文化	159
1	診断を受けるということ	160
	映像による診断	160
	画像診断への違和感	160
2	近代以前の診断術	161
	問診による診断	161
	解剖学の展開	163
3	近代医学の誕生	164
	臨床医学のまなざし	164
	聴診と触診	166
4	医療技術と写真術	168
	写真による診断術	168
	写真のまなざし	168
5	映画と X 線	170
	映画と外科医	170
	X 線の衝撃	171
6	見えないものを見る	173

裏返しにされた身体 173 見えないものを見る 174

第 10 章 警察と軍事における映像文化 ————— 177

- 1 警察と司法写真 …………… 178
顔を歪める女性 178 19 世紀のバリ 179 個人の特定
化 180
- 2 軍事と映像 …………… 183
警察化した軍事行動 183 イコンとしての軍事映像 186
ゲーム化する軍事行動 188
- 3 日常化する警察・軍事映像 …………… 190
日常の警察・軍事の映像 190 監視カメラの映像 191
不安と恐怖の遍在化 192

第 11 章 人類学における映像文化 ————— 195

- 1 映像と人類学のまなざし——初期の実践者たち …………… 196
黎明期の映像と人類学——「異文化」の発見 196 参与観
察と記録——マリノフスキ『西太平洋の遠洋航海者』 197
ドキュメンタリーと再現——フラハティ『極北のナヌーク』
198 映像による人類学——ベイトソン／ミード『バリ島人
の性格』 200
- 2 人類学における映像の位置——記録と再現，科学と芸術の間で
…………… 202
研究資料としての映像——ルロワ＝グーランと身ぶりの記録
202 「言葉の学問」への批判——マーガレット・ミードと映
像による人類学 203 民族誌映画の創造——ジャン・ルー
シュと「シネマ・ヴェリテ」 205
- 3 映像と文化の詩学／政治学——方法論的・認識論的な課題
…………… 206
表象の危機と映像——批判的人類学とまなざしの政治学 206
芸術と人類学の境域——民族誌的シュルレアリスム 208
映像＝人類学以前への廻行——フィオナ・タン『ディスオリエ
ント』 210

第4部 呪術としての映像文化

第12章 スターという映像文化 ————— 217

- 1 スターという存在の不思議さ …………… 218
スターと私たちの非対称な関係 218 映画から生まれるスター 219
- 2 超越的な存在としてのスター …………… 221
崇拜と憧れ, そして模倣の対象としてのスター 221 消費社会とスター 222 憎しみの対象としてのスター 224
- 3 「親しみ」の存在としてのアイドル …………… 225
TVとアイドルの関係 225 日常を「見る」ことへの興味 226 「業界人」のように「見る」ことの出現 227
- 4 多様なスター・アイドル文化のなかの「見る」こと …………… 228
「会う」アイドルの興隆 228 アイドルのように「撮る」・「見せる」こと 229 非対称に「見る」ことの残存 230

第13章 心霊現象という映像文化 ————— 233

- はじめに——写真という「死」 234
- 1 心霊写真の誕生と死——ステージ1 …………… 234
あるものがある心霊写真 234 なかったものがある心霊写真 235 現実認識のゲーム 236
 - 2 心霊写真の2度目の死——ステージ2 …………… 238
3点認識型の心霊写真 238 ステージ2の終焉 239
 - 3 メディアの間にある心霊写真——ステージ2・5 …………… 240
心霊写真の復活と80年代末の力学 240 心霊ビデオとJホラー 242
 - 4 デジタル写真以降の心霊写真——ステージ3 …………… 243
90年代からの写真の変容 243 心霊写真の変容 244
00年代のデジタル写真 245 現代の心霊写真の新たな時制 246

第 14 章 アニメーションという映像文化 ————— 249

1	アニメーションの生命力	250
	アニメーションの位置 250 アニメーションの意味 251	
2	動きが生じるということ	253
	アニメーションの源流 253 映画, またはアニメーション の「父」 255	
3	デジタル技術とアニメーション	256
	「すべての映画はアニメーションになる」 256 ポストプロ ダクションとアニメーション 257	
4	完全映画とアニメーション	259
	完全映画の神話 259 完全映画におけるアニメーション 260	
5	モーショキャプチャとアニメーション	261
	動きを抽出するということ 261 動きを合成するというこ と 262	
6	アニメーションという動き	264
	フル／リミテッド・アニメーション 264 動きとしてのア ニメーション 265	
	参考文献	269
	索引	279

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することは、たとえ個人や家庭内での利用でも著作権法違反です。

第2章

映画というテクノロジー



リュミエール兄弟のシネマトグラフ (Albert A. Hopkins ed., 1897, *Magic: Stage Illusions and Scientific Diversions, Including Trick Photography*, Munn & Co., p. 510)

「映画」といえば、私たちはハリウッドで製作され、映画館やDVDで見る大衆娯楽作品のことをすぐにイメージする。しかし、ここではその常識を疑ってみたい。リュミエール兄弟は、映画というテクノロジーを科学の実験装置として開発した。だから最初それは娯楽というより、科学の領域から出発した。また他方、現在のデジタル・ビデオカメラの普及は、「見る」楽しみとしてではなく、「撮る」楽しみとしての映画文化を普及させている。つまり本章では、映画を人類が19世紀末に手にしたテクノロジーとして考え、これをどう扱ってきたかの歴史をたどることで、映画文化を別の枠組みから考え直したい。

1 テクノロジーとしての映画

科学装置としての映画

映画はテクノロジーとして発明された。目の前に起きている現実の光景を、1秒間に18枚とか24枚といった目に見えない高速度でカメラが次々と静止写真として捉え、その静止写真を同じ速度で間歇的に映写したとき、観客はその映像を動くままに捉えられた現実として（錯覚的に）知覚する。これが動く映像としての映画を成り立たせている基本的なメカニズムだろう。撮影段階では「写真」と同様に現実を光学的に捉えるが、しかし再現段階では紙などの上に固定化されるのではなく、つねに時間的な現象としてヴァーチャルに再現される。だから観客は、写真のように物質としてそれを所有して能動的に眺めるのではなく、音楽のように時間的な流れとして受動的に経験するしかない。こうしたテクノロジーとしての特徴が、映画という映像文化の基底的部分をつねに規定している。

だがむろん、こうしたテクノロジーとしての映画の特徴が、そのまま20世紀にハリウッド映画産業を中心に発展してきた、観客が恋愛物語や戦争スペクタクルを楽しむ文化に反映させられているわけではない。実際のところ、19世紀末に映画を発明したフランスのリュミエール兄弟（1895年）は、こうした娯楽文化としての映画を想像していたわけではなかった。発明期の映画は、むしろ顕微鏡やX線などと同様に、生物の動きのメカニズムを明らかにするための実験器具の1つだったといったほうがよいだろう。たとえば映画発明直後の1897年、スコットランドのジョン・マッキンタイアは、カエルの足の動きをX線写真で連続的に撮影してその写真群をループ状につなげて映画化したというし、1898年にオーストリアのルートヴィッヒ・ブラウンは、生きた犬の心臓を取り出してその鼓動する様子を映画撮影したという。ここでは映画とは、人間の肉眼では捉えられない生物の「動き」を観察し、記録し、再現する生理学のための科学装置として考えられていたのだ。

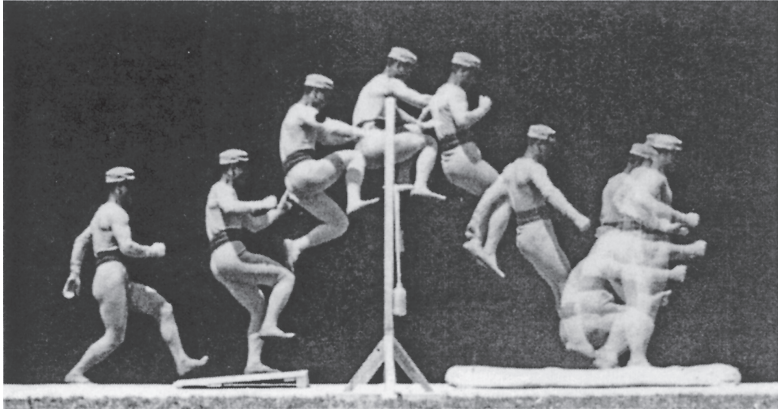


図 2-1 マレーの連続写真 (Marta Braun, 1992, *Picturing Time: The Work of Etienne-Jule Marey*, The University of Chicago Press)

マレーとマイブリッジの連続写真

映画が科学装置であったことは、映画以前の原型的な機械装置の歴史を見ても明らかである。その歴史には2つの系譜があったが、それらはいずれも人間の生理学的研究に関わっていたからだ。1つの系譜は、1860年代から80年代にかけて、フランスのエティエンヌ＝ジュール・マレーやアメリカのエドワード・マイブリッジが、人間が歩行したり、馬が疾走したり、鳥が飛翔したりする動きのメカニズムを、高速の連続写真を利用して図表的に記録しようとしたときの一連の実験装置である。その実験結果では、動物の動きや人間が歩いたり投げたりするような動作が、等間隔に分解された写真として図表的に提示されている(図2-1)。とくにマレーは生理学者として、脈拍や血圧を図表的に記録する装置と同じ文脈でこの運動の連続写真を活用しようとしていたのであって、そこには娯楽的要素は一切なかった。

もう1つの系譜は、1820年代から30年代にかけて人間の目がいかに世界を捉えているかという生理学的メカニズム(の限界)を明らかにするために発明された、ソーマトローブ、フェナキスティスコープ、ゾーエトローブなどの実験器具である。これらはいずれも人間の目が何かを見たあと視覚に像が残って、次に見たものに重なって見えるという網膜残像現象を人工的に引き起こすために考案された実験器具である。このうちフェナキスティスコープは、円板に8



図 2-2 フェナキスティスコープ (Museum for the History of Sciences, Ghent)

つ (もしくは16) のスリットを入れ、そのスリット間にパラパラ漫画の要領で、一連の分解された人間の「動作」を描き、この円板を鏡に向けて回転させて、どれかのスリットから覗くと、残像効果によって断続した動作が連続した運動として錯覚されるという装置である (図 2-2)。私たちはそれらの装置を通して、漫画的イラストで描かれた人間が、踊りや跳躍や疾走などのアクションを無限に繰り返しているのを見ることができる (今でもパラパラ漫画、アニメーションとしてお馴染みである)。

マレーらの連続写真で空間的に提示されている人間の歩行の分解写真を、フェナキスティスコープの機構を利用して、連続的な動きとして時間的に提示したときに「映画」が生まれるといえるだろう。つまり映画とは、人間の動作を観察するための科学的探究 (連続分解写真) と、人間の眼に運動の錯覚を与えるために考案された実験装置 (フェナキスティスコープ) とが結びつけられて生まれた、独特の科学装置なのだ。だから映画は、人間の生理的活動を観察し、数量的に計測し、さらには人工的に操作したいという科学者たちの欲望から生まれたということになる。

実際リュミエール兄弟の工場は、シネマトグラフが爆発的人気を獲得したあとでも、医学的・生理学的実験用の特殊なカメラやフィルムを開発し続けたのであって、娯楽用映画作品をつくったわけではなかった。だから映画というテ

クノロジーは最初期にあっては、あくまで科学の領域にあった。ただし、暗闇のなかでのイメージの光学的提示（映写）という部分に関しては、マジック・ランタン、パノラマ、ジオラマといった、第3の系譜としての娯楽的文化の系譜が絡んでくるとされる。この3つ目のスペクタクルの欲望の系譜が加わることによって、映画は以下のような娯楽文化へと変化していったといえるだろう。

2 「撮る」文化から「見る」文化へ

「撮る」文化としてのシネマトグラフ

リュミエール兄弟が1895年末に、彼らが発明したシネマトグラフという機械を宣伝するために開催した上映会は、自分たちが予想もしなかった反響を人びとに巻き起こし、映画の歴史に新しいパラダイムを切り開いた。それは簡単にいえば、「撮る」文化のパラダイムから「見る」文化のパラダイムへの変化である。シネマトグラフにいたる19世紀の映画テクノロジーの歴史が、カメラを介して世界を図表化して理解したいという科学者たちのパラダイムに属していたとすれば、シネマトグラフ上映会から今日まで続く20世紀の映画のパラダイムは、カメラを通して世界を感受したいという観客たちの欲望に属してきたといえる。言い換えれば「撮影」を中心とした製作者の文化から「鑑賞」を中心とした消費者の文化への変容が起きたのだ。

さて、そのパラダイム・チェンジの起点となったのが、リュミエールのシネマトグラフ上映会である。それは、1895年12月28日にパリのグランカフェで開催された。上映された作品は、工場の門が開かれると大勢の労働者たちが手前に向かって歩いて出てきては左右に去っていく『工場の出口』、庭先にテーブルを出した若い夫婦と赤ん坊が食事をする微笑ましい光景を捉えた『赤ん坊の食事』（図2-3）、男が水撒きをしていると、少年が後ろから近づいてホースを踏んで水を出なくさせ、男がホースを覗きこんだところで足を離すという悪戯を演じさせた寸劇『水をかけられた撒水夫』、さらに初日は上映されなかったがのちに大きな評判になった、駅のホームに置かれたカメラが遠くから走

索引

事項索引

● アルファベット

AKB48 の総選挙 228
Apple(アップル) 73
AR 114
ARPANET 68, 71
『ASAYAN』(あさやん) 228
BBS 70
BS 59
cameran 114
CdV →カルト=ド=ヴィジット
CGI 256, 257, 261
CS 59
CT 160, 173
DIY 72, 74, 76
DPE 92, 239
Dynabook(ダイナブック) 69, 71, 73, 76
ENIAC 67, 71
Facebook 190
FLR 184
GIF アニメ 256
GUI →グラフィカル・ユーザ・インタフェース
HDR 写真 114
IHADSS 185
Instagram 65, 115
J ホラー 242, 245, 247
KDKA 49
MRI 160, 173
NHK 52
OS 73
PC →パソコン
PNVS 184
PTSD(心的外傷後ストレス障害) 189
SFX 32, 40
SNS 23, 64, 65, 95, 96, 108, 110, 190-192, 229, 245

—のシェア機能 246
—のタグづけ 246
SNS(写真)コミュニケーション 108, 109, 116
TADS 184
TV ゴースト 241
VFX 256
Windows95 73
X 線(写真) 160, 171, 172, 237
YouTube 4, 135

● あ 行

アイコンスコープ 47
アイコン 71
アイデンティティ 180, 182, 183
—の復元・分類・管理 180, 182
アイドル 218, 225-231
『アウフォト』 106
アウラ 1, 4, 6, 38, 219, 224, 231
—の凋落 1-6, 219
アーカイブ 152
『明るい農村』 56
『明るい部屋』 13
『赤ん坊の食事』 29
秋葉原殺傷事件 113
アップル・コンピュータ 73, 74
アナログ写真 16, 108
アニメ化された画像 258
アニメーション 5, 28, 38, 249-258, 260, 261, 263, 266
—の源流 253, 256, 258
—の制作現場 266
—の生命力 251
『アバター』 257
アパッチ 184, 185, 187, 188

- アポロ 11 号の月面着陸の世界同時生中継
55, 130, 132, 134
- アマチュア 21, 48, 70-73, 241
- アメリカの消費生活 129
- 『アメリカン・スナイパー』 189
- アーリントン国立墓地 144, 145
- アローヘッド 184, 185
- 安全 190-192, 194
- アンプロタイプ 17
- 遺影写真 102, 121, 125
- 硫黄島記念切手 144
- 『硫黄島の砂』 146, 152
- 「硫黄島の星条旗」 4, 137-154
- 医学写真 235
- 胃カメラ 4, 173
- アイコン 181, 183, 184
—としての軍事映像 186, 187
—としての身体 194
- アイコン性(模造) 111
- 『意志の勝利』 126, 127
- イーストマン社 21
- 一太郎 75
- 一家団欒 56, 57
- イデオロギー 37, 189
- 移動式戦争記念碑 148
- 『生命を吹き込む魔法』 264
- イメージオルシコン撮像管 51
- イラク戦争 151, 186
- 医療 4
- インターネット 94, 152
—の時制 246
- インターネット放送 61
- インデックス 111, 181, 182, 188, 242, 243
- ウインドウ・システム 68
- 「宇宙船地球号」 132
- 写ルンです 103, 104
- 映画 1, 3, 26, 28, 46, 52, 125, 129, 167, 178,
196, 198, 219, 226, 250, 255
—というテクノロジー 31
—のイデオロギー批判 36, 37
アトラクションの— 32-34, 37, 39, 40
古典的— 32, 34, 35, 39, 40
- 映画研究 133
- における精神分析的アプローチ
133
- 映画スター 125
- 映画装置論 37
- 衛星(生)中継 120, 132
- 衛星放送 59
- 映像 193, 211
—としてのパーソナル化 70
—の疑似アウラ性 224
—のデータベース化 185
- 映像イメージ 223
- 映像化 193
—された身体 189
- 映像社会学 195
- 映像人類学 199, 203, 212
—に関する決議 206
- 映像テクノロジーの進展 229, 230
- 映像文化 1, 2, 5, 6, 256, 260, 266
—の社会学 5
20世紀の— 120, 121
- 映像文化研究 133
- 映像編集ソフト 257
- 『駅馬車』 36
- エクストラ 237
- エスキモー 198, 199
- 『エネミー・オブ・アメリカ』 191
- エリオグラフィ 10
- 炎上(事件) 23, 64, 109
- 『おいしいビール』 254
- 応用人類学 212
- 大型スクリーン 75
- オーディション 227
- オートフォーカス 21
- 『オリエンタリズム』 207
- オリエンタリズム批判 206
- 『オリンピア』 126-129, 131, 134
- オリンピック 55, 120, 129
- オンデマンド・サービス 59, 60
- 「女の子写真」ブーム 114
- か 行
- 解釈人類学 206
- 街頭緊急通報装置 190

- 街頭テレビ 52, 55, 60
 街頭テレビ日報 52
 海兵隊博物館 150
 解剖学 163
 カウンター・カルチャー 41, 72, 74-77
 拡張現実の時代 116
 画像共有サイト 245
 画像診断 160, 161, 173
 家族 3
 家族アルバム 101, 103, 104, 121
 家族写真 101-103, 122
 合衆国海兵隊記念碑 144, 145
 活版印刷 164
 家庭用ビデオデッキ 41
 『悲しきピエロ』 254
 『カノッサの屈辱』 58
 歌舞伎 221
 カメラ 245, 252, 261
 —の自動化・小型化 92
 カメラ・オブスキュラ 10, 11, 49
 カメラ付携帯電話 22, 94
 カメラ付スマートフォン 120
 『カルトQ』 58
 カルト=ド=ヴィジット (CdV, 名刺判写真)
 17, 18, 84-86, 91, 92, 124
 カロタイプ 12, 17, 196
 観光のまなざし 114
 感光版(フィルム) 13, 16, 20
 監視 190-192, 194
 監視映像 194, 245, 247
 監視カメラ 4, 177, 190-194
 監視モニター 245
 『間接聴診法』 166
 完全映画 259, 260
 「完全映画の神話」 259
 観相学 169
 管理 190, 192, 194
 機械式テレビジョン 47
 幾何学的連続写真 261, 262
 疑似イベント 142, 143, 147, 222
 疑似同期化 247
 キネトスコープ 255
 記念写真 101, 105, 106
 キャラクター 251, 261, 263, 264
 911 テロ 150-152
 驚異の部屋 196, 211
 胸部 X線写真 4
 『興味深い時代を生きますように』 210
 『極北のナスрук』 197-199
 虚構の時代 113
 儀礼的空間 125
 記録映画 5, 203
 近代化 87, 102
 近代社会 105, 224
 近代心靈主義 234
 近代ナショナルリズム 145
 近代の表象原理 246
 近代批判 208
 偶像 223
 組写真 202
 クラ(交換) 197
 「グラウンド・ゼロの星条旗」 150
 グラビア誌 220
 グラビア写真 126
 グラフィカル・ユーザ・インタフェース(GUI)
 68, 73, 74
 グラフィック革命 223
 クローズアップ 38
 軍事 184
 軍事行動 185-188
 警察化した—— 184, 186, 190
 群衆 180
 警察 178-181
 警察・軍事映像 190
 携帯電話(ケータイ, ケータイ電話) 60, 65,
 75, 77, 257
 『啓蒙の弁証法』 37
 『激突!』 40
 血圧測定 167
 『月世界旅行』 32
 ケーブルテレビ 59
 原形質 251
 『小悪魔 ageha』 112
 光化学 20
 光学 20
 広告映像 249

- 『工場の出口』 29
 合成技術 256
 構造人類学 206
 高度経済成長 129
 『紅白歌合戦』 56, 57
 交霊会 233-235
 交霊会写真 236
 国債ツアー 142, 143, 153
 国民(ネーション) 145
 国民国家 4, 102, 122
 個人 3
 —のアイデンティティ 122
 —の特定化 180
 御真影 4, 122-126, 129, 131, 133
 —の神聖性や呪術性 125
 明治6年の— 123, 128
 明治21年の— 123, 128, 133
 コスプレ文化(コスプリ) 111
 コードのないメッセージ 139, 141, 151, 154
 子ども向け番組 57
 コミュニケーション 4
 盛る— 111, 114
 ゴールデンアワー 56
 コンテンポラリー・アートの民族誌的転回
 210, 211
 コンピュータ 257
- さ 行
- 再帰性 reflexivity 104
 再帰的な自己の維持 110
 再帰的な人間関係の構築 106, 107
 サイレント映画 32
 詐欺ブリ 112, 115
 ザ・コダック 21, 92
 『サザエさん』 252
 撮像 46
 『サモアの思春期』 200
 3点認識型 238
 参与観察 197
 ジオラマ 10, 29
 視覚(的)効果 39, 40, 249, 256, 266
 視覚社会学 195
 『視覚の人間』 38
- 視覚のリアリティ 246
 『時間ですよ』 227
 『地獄の黙示録』 41
 自己肯定 110
 私生活 129, 130, 132
 『時代の顔』 86
 視聴者 228
 実写映画 252, 253, 257, 258
 実写映像 261, 263, 264, 266
 湿版コロディオン法 17, 82
 私的空間 122
 私的な映像文化の時代 132
 自動車ナンバー自動読取装置(Nシステム)
 190
 自撮り 245
 シネ＝トランス 205
 シネマ・ヴェリテ 205
 シネマトグラフ 28-30, 172, 220, 254
 ジブリ(作品) 252, 265
 司法写真 87, 90, 177-180, 190, 235
 シミュラクル 107, 111, 147
 シミュレーター 188
 指名手配写真 181, 182
 指紋 89
 指紋法 183
 社会(的)制度 121, 122
 社会秩序 4, 87, 125, 128, 129
 国家主義的な— 131
 社会的記号 85-87
 『邪願霊』 242
 写交性 109
 写真 1, 3, 65, 100, 101, 113, 120-122, 125,
 139, 167, 168, 180-183, 196-198, 200, 219,
 220, 223, 225-237
 —と被写体の同一視 15, 19
 —の意味作用 152
 —の痕跡性 13-18, 20
 —の自動(処理)機構 235, 239, 240
 —の大衆化 92
 —のデジタル化 108
 —の複製性 17, 18, 20
 —の文化 12, 18, 20, 23, 100
 —の流通(拡散) 108, 109

——を撮ることの大衆化 20-23
 ——をめぐるコミュニケーション 101
 写真印刷(写真製版) 19
 写真研究 133
 ——における記号論 133
 写真コミュニケーション 102, 104, 105
 ——の個人化 103, 104
 現実を盛る—— 113, 114, 116
 写真術 10-13, 15, 87, 96
 写真投稿サイト 135
 ジャストシステム 75
 ジャニヲタ 230
 写メール(写メ) 22, 93, 108
 宗教画 38
 「17歳」 227
 重要指名手配被疑者の(ポスター)写真 177, 178
 16ミリフィルム 202
 呪術性 124, 126
 受像 46
 『ジュラシック・パーク』 257
 シュルレアリスム 205, 208-210
 シュルレアリスム宣言 209
 肖像画 38
 肖像写真 14, 17, 82-84, 86-92, 95, 121, 122, 124
 ——の大衆化 17
 パスポートの—— 90
 承認 230
 消費社会 146-149, 223
 消費生活 130
 情報通信テクノロジー 184-187, 191
 証明写真 87, 121, 122
 ジョージ・イーストマン社 21
 『白雪姫』 250, 264
 シリー・シンフォニーシリーズ 251
 新3人娘 227
 『人体の構造』 164
 『診断術の歴史』 162
 心電図 167
 新派 221
 人類学 196, 199, 203-206, 208, 211, 212
 人類学批判 211

人類学フィルム・アーカイブ 206
 心霊映画 243, 247
 心霊映像 233, 244-247
 インターネット上の—— 247
 心霊写真 5, 193, 235-238, 240, 243, 244, 246
 ——の1度目の死 238
 ——の語られ方 239, 241
 ——のステージ1 238
 ——のステージ2 238-240, 242
 ——の第2の死 240, 241
 あるといえばある—— 238
 あるものがある—— 235
 心霊写真師 235-237
 心霊写真スタジオ 233, 238
 心霊写真ブーム 240
 心霊動画(サイト) 233, 243
 心霊ビデオ 5, 241, 242, 245, 246
 ——にまつわる都市伝説 242
 心霊ホラー作品 242
 スカッシュ&ストレッチ(潰しと伸ばし) 264
 スター 5, 217-219, 221-225, 228-231
 ——の神話性 226
 スター・アイドル化現象 230
 『スター・ウォーズ』 257
 『スター・ウォーズ エピソード1』 257
 スターシステム 220
 ステレオ写真 18
 ステレオ・スコープ 18
 ストラップゴースト 240
 砂嵐 243
 スーパー防犯灯 190
 スペクタクル 172, 258
 スマートフォン(スマホ) 60, 65, 75, 77, 94, 229
 ——における写真加工アプリ 114
 スマトラ島沖地震におけるインド洋の大津波の記録映像 135
 3D(映像) 32, 40, 260
 スローモーション 38
 成婚パレード 53
 『精神の生態学』 200
 西部劇 34

ゼラチン乾板 17
セル画 266
セルフイ(自撮り)写真／画像 94-96, 230
——をめぐるコミュニケーション 95
セルフ・ポートレート 82, 94, 96
全自動カメラ 239
戦争ゲーム 177, 183, 188
戦争の映像化 184
走査 46
想像の政治共同体 145
『贈与論』 197, 209
ゾーエトローブ 27
ソーシャルネットワークワーキングサイト 229
卒業アルバム 5
ゾープラクシスコープ 255, 256
ソーマトローブ 27, 253

● た 行

大河ドラマ 56
大衆娯楽文化 31
大衆文化 5
タイムライン 191
タグ付け 190
タグによる写真管理のシステム 110
ダゲレオタイプ 10-12, 14-17, 82-84, 196
他者への非対称な崇拜 230
タッチパネル式 76
タブレット端末 76
多摩ケーブルネットワーク 59
『探偵王ニック・カーター』 219
『父親たちの星条旗』 152-154
超音波画像 160
超音波診断装置 173
聴診器 166
通信 48-50, 60, 61
つながり 115
——の可視化 110
——の社会性 110
テアトル・オブティーク 254
『ディスオリエント』 210-212
ディズニー(映画) 5, 250-252, 262, 265
ディスプレイ 71
テクニカラー 250

テクノロジー(複製技術) 2
デジタル・アーカイブ 212
デジタル・カメラ 3, 16, 22, 94, 120, 132, 244
デジタル・カメラ付携帯電話 93, 94
デジタル技術 256
デジタル・サイネージ広告 75
デジタル写真 16, 22, 108, 243
デジタル・ビデオカメラ 25, 31, 41, 135
デジタル放送 60
デスクトップ 68
データベース 110
鉄道 179
『鉄腕アトム』 265
テレトロスコープ 49
テレグラフ(電信) 46
テレビ 3, 46, 50, 130, 172, 194, 225-228
——のオーディエンス研究 134
大晦日の—— 56
テレビアニメ 265
テレビ研究 133
——におけるオーディエンス論 133
テレビコマーシャル 129
テレビ受像機 52
テレビジョン 46, 52, 129
テレビジョン電話 50
テレビ離れ 59
テレビ放送 55
テレフォン(電話) 46
電子式テレビジョン 49, 51
電磁波 237
天皇制の儀式 129
『天皇の肖像』 122
トイカメラ 114
東映動画 265
動画合成 253, 254, 259, 260, 265, 266
動画投稿サイト 135
東京スカイツリー 61
投稿型心霊映像 238, 239, 241, 242
投稿鑑定システム 240
投稿ビデオ 247
同時多発テロ事件 55
『東芝日曜劇場』 56
『東方見聞録』 196, 211

トーキー映画 32
『ドキュマン』 209
ドキュメンタリー映画 199
『独裁者』 189
読者モデル 230
トマホーク 186
止め絵 265
『ドラえもん』 252
トリック(撮影) 33, 38
『ドリーの冒険』 34, 36
撮ること／撮られることの大衆化 92
撮る文化 22
ドローン 186, 188, 189

● な 行

内視鏡 160, 173
内 閉 109
ナショナルリズム 4
『ナショナルゴールデン・アワー』 56
ナショナルな共同性 55, 57
ナチュラル盛り 115
ナヌーク 199
ナマ写真 20
ニコニコ動画 76
『西太平洋の遠洋航海者』 197, 198, 200, 206
『20世紀の人間たち』 86
日常写真 93, 95
日常写真ブーム 93, 105
2ちゃんねる 76
ニブコー円板 47
日本映画 221
日本テレビ(NTV) 51, 52
日本放送協会 51
ニュース映画 126
ニュース映像 120, 130
ニューメディア 59
『人魚の踊り』 251
『人間の顔貌のメカニズム』 169
ニンテンドー戦争 188
スーヴェルヴァーグ 206
ネ ガ 11, 12
ネガ・ポジ法 11, 12, 15, 17
『呪われた部分』 209

● は 行

バイオメトリクス 183
バカッター 109
バケット通信 69
パソコン(PC) 3, 64-66, 70, 76, 77
パーソナル化 3, 65, 66, 71, 72, 74, 77
映画文化の—— 39, 41, 42
コンピュータの—— 71, 73
文化としての—— 75
見ることの—— 58
パーソナル・コンピュータ 41, 69, 94
パーソナルな私的経験 135
パーソナルな文化 132
バーチャルな他者 225, 231
バーチャル・リアリティ 260
パノラマ 29
ハーフトーン印刷(網目写真版印刷) 19
バラバラマンガ 28, 256, 258
ハリウッド(映画) 5, 26, 31, 32, 37, 40, 146, 220, 221, 256
『パリ島人の性格——写真による分析』 197, 200, 202, 203
パリ民族学会 196
パロディ広告 147
『ハワイ・マレー沖海戦』 126
犯罪者記録カード 88
『犯罪者写真台帳のための被写体』 178, 179, 182
反戦運動 70, 71
反体制運動(カウンター・カルチャー) 70
反体制文化 72
東日本大震災の津波を捉えたホーム・ムービー映像 135
光のバントマイム 254
ピクサー社 252
被写体 13-16, 18, 20, 205, 234, 236
——の自意識 95
非対称な関係 218, 225, 226
ビッグデータ 212
ヒッピー文化 41, 70, 72, 75, 76, 131
ビデオ 242, 247
——における TV ゴースト 241
ビデオデッキ 59, 247

- ビデオテープ 242, 247
『人及び動物の表情について』 169
批判的人類学 206, 208
ビュリッツァー賞 140
ファクシミリ 46
ファン 225, 227, 228
『ファンタジア』 250
フィールドノート 203
フィルム写真文化 111
フェナキステイスコープ 27, 28, 253, 255, 256, 258
フェルアルバム 102, 104
フォトジェニック・ドローイング 12
フォトジェニックな心霊写真グラビア時代 241
フォト・ジャーナリズム 202
『フォレスト・ガンブ』 257
不可視光 237
複数フレーム性 246
複製(技術) 1, 3, 5, 38, 125, 142
複製技術革命 143
「複製技術時代の芸術作品」 38, 170
複製芸術論 6
プライバシー 130
ブラウン管 172
ブラクシノスコープ 254
ブリクラ(プリント倶楽部) 4, 93, 99, 105-109, 111-114, 120, 229
——のコミュニケーション 107, 111
公衆電話に貼られた—— 107
ブリクラ手帳 106, 107, 109
フル・アニメーション 265
ブルジョワジー(市民階級) 3, 84-87, 121, 122
フレーム 246
フレーム内フレーム映像 241
プロジェクトン・マッピング 114
プロバガンダ映画(映像, 装置) 126, 132, 148
プロマイド写真 18
フロンティア精神 75
文化産業 37
『文化の窮状』 208
文化の社会学 206
『文化批判としての人類学』 208
『文化を書く』 206, 208
ヘッドレスト 234
『ベティ・ブーブ』 262
ベトナム反戦 70, 71, 225
ベルティオン・システム(方式) 88, 180-183
ベルリン・オリンピック 126
放射線 237
放送 48, 50, 51, 53, 55, 59-61
報道写真 120, 125, 139, 141, 151
防犯 190-192, 194
ポケットアルバム 104
ボジ 11, 12
ポスト構造主義文学理論 208
ポスト古典的映画 32, 40
ポストコロニアリズム 208, 210, 211
ポストプロダクション 257, 258
ポータブル・テープレコーダー 205
ポップ・カルチャー 146, 150, 153
ポトラッチ 197
ポートレート写真 229
『ポバイ』 262
ホーム・ムービー 4, 120-122, 135
「ホール・アース・カタログ」 72-77
『本当にあった呪いのビデオ』シリーズ 241
- ま行
マイクロソフト社 73, 74
マイコン 74
マジック・ショー 235
マジックランタン 29, 254, 255
マスコミュニケーション 100
マスメディア 20, 142, 220
マッキントッシュ 73
マルチプレーンシステム 250
『水をかけられた撒水夫』 29
ミッキーマウス 38, 251
ミニアルバム 105
身分証明書 87
脈波計 167
ミュージックビデオ 256
見ることの大衆化 92

「見る」文化 32
 —としての映画 31, 36
 民主化 4
 民主主義 1
 民族学 196, 212
 民族学研究所 209
 民族誌 204, 206-210, 212
 民族誌映画 203, 205
 民族誌学的映像 208
 民族誌的シュルレアリスム 210
 民族誌的眞実 207
 無線 48, 49, 55
 無名性 5
 名刺判写真 17, 84, 125
 メインフレーム 67, 68
 メディア・イベント 57
 「メント(・モリ)」から「モメント」への変容 245
 モーションキャプチャ 256, 261, 262, 264
 モダニズム 208
 モニター 244
 物語性の有無 255
 モーフィング 256
 模倣 221, 223, 229
 盛りぶり 112
 盛る 110, 112, 115, 116

●や行

有名人 223
 『夕やけキャンキャン』 227
 『愉快な百面相』 253

ユーザー生成コンテンツ 245

●ら行

『ライフ』 19
 ライブドアによるニッポン放送の買収騒動 61
 ラジオ 48, 50-52
 リア充 113, 116
 リアリティ感覚の希薄化 113
 理想の時代 113
 『リフト』 210
 リミテッド・アニメーション 265
 『臨床医学の誕生』 164
 霊媒 234, 235, 238
 『列車の到着』 30
 『レ・ミゼラブル』 180
 連合赤軍による浅間山荘事件 55
 レンズ付きフィルム(使い捨てカメラ) 21, 93
 『連続テレビ小説』 56
 レンタル・ビデオ 41, 242
 レンタル・ビデオ店 247
 ロトスコープ 250, 263, 264
 ロンドン民族学会 196

●わ行

早稲田式テレビジョン 49
 『私をスキーに連れてって』 103
 ワールドカップ 55, 120
 湾岸戦争 184, 188
 ワンセグ放送 60

————— 人名索引 —————

●ア行

赤田祐一 74
 浅羽通明 104, 239
 アーチャー(Frederick Scott Archer) 17
 アドルノ(Theodor W. Adorno) 37
 天地真理 227
 アームストロング(Neil Alden Armstrong)
 130, 131

嵐寛寿郎 222
 アーリ(John Richard Urry) 114
 アルチュセール(Louis Pierre Althusser)
 151
 アルバート公 124
 アンダーソン(Benedict Richard O'Gorman
 Anderson) 145
 飯田豊 50

石原裕次郎 222
イーストウッド (Clint Eastwood) 152, 189
市川右太衛門 222
稲増龍夫 226
ヴィクトリア女王 124
ウィリアムズ (Raymond Henry Williams)
206
ヴェイリリオ (Paul Virilio) 186, 187
ウェイン (John Wayne) 146
ヴェサリウス (Andreas Vesalius) 164
ヴェルトフ (Dziga Vertov) 205
ウェルドン (Felix Weihs de Weldon) 144
ウォズニアック (Stephen Gary Wozniak)
73
内田九一 123
宇野常寛 116
エイゼンシュテイン (Sergei Mikhailovich
Eisenstein) 251, 258
AKB48 228
エッカート (John Adam Presper Eckert, Jr.)
67
エディソン (Thomas Alva Edison) 172, 255
エンゲルバート (Douglas Carl Engelbart)
68-71, 73
大河内傳次郎 221
太田省一 227, 229
押井守 257
おニャン子クラブ 227
オルドリ (Buzz Aldrin) 130

●カ行

カイル (Christopher Scott Kyle) 189
片岡千恵蔵 221
加藤秀俊 226
加藤裕康 94
ガニング (Tom Gunning) 32, 39, 181
カリム (Jawed Karim) 135
ガルボ (Greta Garbo) 221
ガレノス (Claudius Galēnos) 162, 166
ギアーツ (Clifford James Geertz) 206
北野謙 89
ギデンズ (Anthony Giddens) 104
キャメロン (James Francis Cameron) 257

ギュンテール (André Gunther) 95
キョッソナーネ (Edoardo Chiossone) 123
キーンホルツ (Edward Kienholz) 148
クーバー (Gary Cooper) 221
グラムシ (Antonio Gramsci) 151
グリフィス (D. W. Griffith) 34, 35
クリフォード (James Clifford) 206-210
ケイ (Alan Curtis Kay) 69-73, 75, 76
ゲイツ (William Henry "Bill" Gates III) 73,
75
ケネディ大統領 (John F. Kennedy) 257
ゲーブル (Clark Gable) 221
小池壮彦 240
高野光平 56
コッポラ (Francis Ford Coppola) 41
小柳ルミ子 227
ゴルトン (Francis Galton) 89

●サ行

サイド (Edward Wadie Said) 206, 207
斎藤環 246
佐藤忠男 57, 218, 224, 226
サドウール (Georges Sadoul) 220
サーノフ (David Sarnoff) 50
さやわか 227
ザンダー (August Sander) 86, 87
サンレク (Constantin Senlecq) 49
島津斉彬 100
シャルコー (Jean-Martin Charcot) 169
正力松太郎 51, 52
ジョブズ (Steven Paul "Steve" Jobs) 73, 75
シンガー (Peter Warren Singer) 188
スウィントン (Alan Archibald Campbell-
Swinton) 47
スコット (Tony Scott) 191
スピルバーグ (Steven Allan Spielberg) 40,
152
ゼメキス (Robert Lee Zemeckis) 257
ソントグ (Susan Sontag) 133

●タ行

ダイアモンド (Hugh Welch Diamond) 168
ダーウィン (Charles Robert Darwin) 169

- 高柳健次郎 45, 47, 49-51
 多木浩二 86, 121-123, 133
 ダゲール (Louis-Jacques-Mandé Daguerre)
 10, 11, 96
 タン (Fiona Tan) 210, 212
 チャップリン (Charles Spencer Chaplin)
 38, 189
 ツヴォルキン (Vladimir Kosmich Zworykin)
 47, 50
 角田隆一 93
 鶴田法男 242
 ディスデリ (André-Adolphe-Eugène Disdéri)
 17, 84
 手塚治虫 265
 デュシェンヌ・ド・ブローニュ (Guillaume
 Duchenne de Boulogne) 168, 169
 鳥原学 229
 トルボット (William Henry Fox Talbot) 11,
 12, 17
 ドワン (Allan Dwan) 146
- ナ 行
- ナダール (Félix Nadar) 14, 82, 83, 85, 86
 ニエプス (Joseph Nicéphore Niépce) 10
 西垣通 75
 蛭川実花 114
 ニプコー (Paul Julius Gottlieb Nipkow) 47
- ハ 行
- ハーヴェイ (William Harvey) 166
 バザン (André Bazin) 14, 259, 260
 バース (Charles Sanders Peirce) 111, 181
 ハースト (William Randolph Hearst) 173
 長谷正人 227
 長谷川一夫 222
 バタイユ (Georges Albert Maurice Victor
 Bataille) 209
 バッチェン (Geoffrey Batchen) 14
 パノフスキー (Erwin Panofsky) 250, 251,
 258, 264
 バヤール (Hippolyte Bayard) 82, 96
 バラージュ (Béla Balázs) 38
 バルザック (Honoré de Balzac) 14
- バルト (Roland Barthes) 13, 133, 139, 141,
 151, 234
 バレンティノ (Rodolfo Valentino) 221
 阪東妻三郎 222
 ヒポクラテス (Hippokratés) 162
 ブーアスティン (Daniel Joseph Boorstin)
 142, 143, 147, 222, 223, 231
 フィッシャー (Michael M. J. Fisher) 208
 フェルゼンスタイン (Lee Felsenstein) 70-
 73
 フォスター (Hal Foster) 210
 フォード (John Ford) 36
 フーコー (Michel Foucault) 164, 165
 ブッシュ大統領 (George W. Bush) 150
 フライシャー兄弟 (brothers Max Fleischer
 and Dave Fleischer) 263
 ブラウン (Ludwig Braun) 26
 ブラックトン (James Stuart Blackton) 253
 フラハティ (Robert Joseph Flaherty) 197-
 199, 205
 フランクリン (Thomas E. Franklin) 150
 ブランド (Stewart Brand) 72, 73, 75-77
 ブルデュー (Pierre Bourdieu) 101
 ブルトン (André Breton) 209
 ベアード (John Logie Baird) 47
 バイトソン (Gregory Bateson) 197, 200,
 202
 ベイン (Alexander Bain) 46, 47
 ベル (Alexander Graham Bell) 46, 49
 ヘルツ (Heinrich Rudolf Hertz) 46, 48
 ベルティヨン (Alphonse Bertillon) 88, 90,
 180-182
 ベンヤミン (Walter Bendix Schönflies
 Benjamin) 1-6, 37, 39, 125, 170, 171,
 180, 219
 ボアズ (Franz Uri Boas) 196, 199
 ボガート (Humphrey DeForest Bogart)
 221
 星合正治 49
 ボードリー (Jean-Louis Baudry) 37, 134
 ボードリヤール (Jean Baudrillard) 146, 147
 ボードレール (Charles Pierre Baudelaire)
 85

ホープ(William Hope) 237
ホール(Stuart McPhail Hall) 151
ホルクハイマー(Max Horkheimer) 37

●マ行

マイブリッジ(Eadweard Muybridge) 27,
171, 255, 256, 258, 261
マークス(George E. Marcus) 208
マクルーハン(Herbert Marshall McLuhan)
54, 64
マッキンタイアー(John Macintyre) 26
松本美香 230
マノヴィッチ(Lev Manovich) 64, 257, 258
マムラー(William Mumler) 236, 237
マリノフスキ(Bronisław Kasper Malinowski)
197-200, 206
マルヴィ(Laura Mulvey) 37
マルコーニ(Guglielmo Marconi) 48, 50
マルコ・ポーロ(Marco Polo) 196, 211
マレー(Étienne-Jules Marey) 27, 28, 167,
171, 261, 262
水越伸 55
美空ひばり 224
見田宗介 113, 116
ミード(Margaret Mead) 197, 200, 202-204,
206
南沙織 227
宮台真司 113
ミュラー(Ray Müller) 126, 128
明治天皇 122, 123
メリエス(Georges Méliès) 32, 38
モークリー(John William Mauchly) 67
モース(Marcel Mauss) 197, 209
モーニング娘。 228
モラン(Edgar Morin) 219, 221

●ヤ行

山口百恵 225
ユーウェン(Stuart Ewen) 223
ユゴー(Victor Marie Hugo) 180
吉田司 222

●ラ行

ライザー(Stanley Joel Reiser) 162
ラエネク(René Théophile-Hyacinthe Laennec)
166
力道山 52
リーフェンシュタール(Leni Riefenstahl)
126-128, 133
リュミエール兄弟(Auguste et Louis Lumière)
25, 26, 28-30, 32, 38, 42, 46, 172, 254
ルーカス(George Walton Lucas, Jr.) 257
ルーシュ(Jean Rouch) 199, 202, 205, 206
ルーズベルト大統領(Franklin Delano
Roosevelt) 142
ルロワ＝グーラン(André Leroi-Gourhan)
202, 203
レイノー(Charles-Émile Reynaud) 254,
255, 258
レヴィ＝ストロース(Claude Lévi-Strauss)
204, 206
レノン(John Lennon) 224
レリス(Julien Michel Leiris) 209
レントゲン(Wilhelm Conrad Röntgen) 171,
172
ローゼンソール(Joe Rosenthal) 140, 145,
146
ロビダ(Albert Robida) 50
ローレンス(Florence Lawrence) 220

●ワ行

ワイリー(Edward Wyllie) 237



映像文化の社会学
Sociology of Visual-Imagery Media

2016年10月10日 初版第1刷発行

編者 長谷正人

発行者 江草貞治

発行所 株式会社 有斐閣

郵便番号 101-0051

東京都千代田区神田神保町 2-17

電話 (03) 3264-1315〔編集〕

(03) 3265-6811〔営業〕

<http://www.yuhikaku.co.jp/>

印刷・大日本法令印刷株式会社 / 製本・牧製本印刷株式会社

© 2016, Masato Hase. Printed in Japan

落丁・乱丁本はお取替えいたします。

★定価はカバーに表示してあります。

ISBN 978-4-641-17424-5

JCOPY 本書の無断複写(コピー)は、著作権法上での例外を除き、禁じられています。複写される場合は、そのつど事前に、(社)出版者著作権管理機構(電話03-3513-6969, FAX03-3513-6979, e-mail:info@jcopy.or.jp)の許諾を得てください。